

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

民族誌：

アーネムランドにおけるアボリジニ社会の変容：
マニングリダ・バウィナンガ・アボリジナル・コー
ポレーション議事録にみるアウトステーション運動
の展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小山, 修三 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003599

II

民 族 誌



アーネムランドにおけるアボリジニ社会の変容

——マニングリダ・パウィナンガ・アボリジナル・コーポレーション
議事録にみるアウトステーション運動の展開——

小 山 修 三*

- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| I. はじめに | IV. BACの構成 |
| 1. アーネムランド | 1. 組織化のプロセス |
| 2. 現代アーネムランドのアボリジニ社会 | 2. 白人の雇用 1—行政顧問 |
| 3. アウトステーション運動前史 | 3. 白人の雇用 2—美術工芸顧問 |
| 4. アウトステーション運動 | V. 議題にあらわれた住民の関心 |
| 5. BAC会議録 | 1. 主な議題 |
| II. マニングリダ・セツルメント | 2. 小切手 (check) |
| 1. マニングリダの歴史 | 3. 基金, 援助金 |
| 2. マニングリダ地域のアウトステーション運動とその要因 | 4. 車 |
| III. BACの設立 | 5. 道路と滑走路の工事 |
| 1. BACの組織化 | 6. 無線 |
| 2. 参加アウトステーション | 7. 聖地 |
| 3. 評議員 | VI. 結論 |
| 4. 人事と部族 | 1. マニングリダ管区のアウトステーション運動 |
| 5. 2人の若者 | 2. 近代化と貨幣経済への適応 |

I. はじめに

1. アーネムランド

アーネムランドはオーストラリア大陸の北海岸部の中央、東経130-137度間、約800kmにわたる位置を占める大きな半島で、南緯12度の熱帯下にある。この地方の気候は熱帯性で、首都のダーウィンでの観測記録によると季節は雨期(10月~4月)と乾期(5月~10月)がはっきり分かれる。雨期の降雨量は1500ミリを上回る。最高気温は11月~12月が33°C、もっとも下がる7月でも30°Cである。最低気温は

* 国立民族学博物館 第四研究部

11～12月で25°C，7月は17°Cであり，年較差より日較差が著しい。

地形は背後に長大な砂岩質断層山塊（海拔200－300m）があり，そこに源を発するアリゲーター，リバプール，ブライス，ゴイダーなどの大河川がアラフラ海に流れ込み，河口部に広い沖積平野をつくっている。この地域の基本的植生はユーカリの卓越する林だが，先史時代以来アボリジニによる放火によって疎林化され，とくに海岸部の低地は草原化している。海水の遡る河岸にはマングローブが発達している。

オーストラリア・アボリジニの祖先は遅くとも4万年前にはこの大陸に上陸し，狩猟採集経済を保ちながら大陸各地の環境に適応した生活を送ってきた。彼らはこの大陸を600以上の部族によって分割していたが，領地の面積は偏差が非常に大きい。部族分布図をみると，アーネムランドは他の地域と比べ領域が小さく分かれ密集しており [TINDALE 1974]，資源に恵まれた地だったことがわかる。

2. 現代アーネムランドのアボリジニ社会

1980年代のアーネムランドの旧保護区であるアボリジニ領 (Aboriginal Land) には，それぞれの地の土地所有者を中心とした平均30人程の成員からなるアウトステーションと呼ばれる小さなムラがあり，それらがタウンシップまたはセトルメントと呼ばれる町に統括され，さらにこれらのセトルメントが西部地域ではダーウィン，東部はノロンボイの二つの都市とつながるとい生活ネットワークができている [小山1988]。

アーネムランドのセトルメントにはその管轄域内にあるいくつかの部族（あるいは言語族）を代表するアボリジニの評議会 (Council) があり，顧問として白人を雇用し，その助言や技術協力を受けながらアウトステーションの行政，経済，医療サービスをおこなう形が一般的である。セトルメントは近代的な諸設備の整った町で，300－1500人の規模からなり，電気，上下水道，電話，行政事務所，マーケット，小学校，診療所，警察，修理工場，定期便のかよう飛行場などをもっている。アウトステーションは基本的にそういった設備をもたず，社会福祉金および食糧をはじめとする商品をセトルメントからの配達サービスに依存している。アウトステーションとセトルメントの人口比率はほぼ3対7であるが，人々はセトルメントとアウトステーション間を四輪駆動車やモーターボートを使い，狩猟採集によって経済の一部を補いながら，身軽に移動（居住地をふくめて）を繰り返している。

3. アウトステーション運動前史

アーネムランドにあるアボリジニ社会のこのような構造は1970年代のはじめにノーザンテリトリーで起こったアウトステーション運動をきっかけとして確立したものである。

アーネムランドには1920年代にオーストラリア政府によって巨大な面積の保護区(Reserve)がつくられはじめ、1931年に正式に保護区となった。これは当時の白人との接触による衝撃によって大きな被害を受け、危機に瀕したアボリジニ社会を守ることを目的としたものであった。政府は消極的な福祉政策としてキリスト教会を利用した。キリスト教会は保護区のなかにミッションをつくり、食糧を供給し、医療を施し、教育をおこなうことによってアボリジニを教化する方針を採ったため、ほとんどのアボリジニがセトルメントに吸収されてしまう状態が起こった。

その結果、少人数のホルドを組んで自己の領域内を遊動しながら狩猟採集の生活を送っていた人々は、他の部族の領域内につくられたセトルメントに多くの部族とともに共住するという新しい体験をすることになった。他部族の領域内に入ったアボリジニは、狩猟をはじめとする活動を大幅に制限され、キリスト教によって土着の儀礼行為も抑圧された。特に男たちは、ミッションのセトルメントでは最低限の食糧が配給(ration)によって保証された結果、狩猟や漁労などの仕事をする必要がなくなり、儀礼行動も禁じられたため、無目的に日常生活を送ることになった。彼らはセトルメントの運営者の白人の命令に従わざるをえず、また他部族との激しい社会摩擦の結果、どこからともなくもち込まれる酒に溺れ、暴力沙汰を起こすというまことに暗澹とした生活を送ることを余儀なくされていた。

オーストラリア政府のアボリジニ対策は、常に遅れが指摘されていたが、第二次大戦後になって少数民族保護に関する国際的世論の高まりとそれをうけた労働党の提言と政策によって急速に整備された。とくに1960年代後半からはアボリジニの市民権、最低賃金問題、社会福祉金の給付、土地権や鉱山使用料などの基本的問題が改善されていった。なかでも重要なのは1967年の国民投票(Referendum)によるアボリジニをオーストラリア市民と認める決定であった。

4. アウトステーション運動

アウトステーション運動が起こったのはこのような動きが一応の定着を見た1970年頃のことである。アボリジニはセトルメントを離れ、領地に帰るといふ拡散(decen-

tralization) 運動をはじめた。人類学者のクームスは早くからこの運動に注目し追跡調査をおこない [COOMBS 1974], これを1973年の ANZAAS 会議で発表した。クームスはアウトステーション運動を、アボリジニ側からはじめておこった自発的な自立化の動きとして高く評価し、政府へ援助の働きかけをおこなうとともに、学会による調査や運動への支持を要請した。その結果アウトステーション運動についての特別シンポジウムや現場からの報告書が数多く発表され [BERNDT 1977], 世論の関心が高まっていった。

アウトステーション運動に対してオーストラリア政府はその意義を認め援助を怠らなかつたのだが、明確な既定方針があつたわけではない。また、担当省間の職責や責任が不明確なこともあつて行政現場での対応は常に後手にまわつた。たとえば福祉、医療、施設などは連邦政府の管轄であり、教育や交通関係はノーザンテリトリー地方政府の責任などと統一性にかける。ところがアボリジニにとってこれらの問題は互いに切り離せないものであり、日常生活に緊急不可欠のものであるが故にいらだちをつのらせる。その結果アボリジニ、現地の白人スタッフ、州及び連邦政府の相互の間に常に摩擦が生じ、事務効率はますます悪化する。それにもかかわらずアウトステーション運動は一応の成功をおさめたと評価してよいだろう。とくにアーネムランド中部のマニングリダ地域は最も円滑な運動の展開が見られることで知られている。

5. BAC 会議録

本論文ではアーネムランド中部のマニングリダ地区のバウィナンガ・アボリジナル・コーポレーション (Bawinanga Aboriginal Corporation) の会議録を中心としてアウトステーション運動の展開の過程と問題点を考えてみたい。会議録は BAC の本部で保管するもので1978年8月31日におこなわれたアウトステーション評議会から始まり、1984年10月現在までのものを現地で記録したものである。BAC の会議は、原則的に四半期毎におこなわれる全体会議と事務的処理を進めるための委員会の二種が主となっており、他に土地利用問題など緊急かつ必須の問題が起こったときに開かれる特別会議がある。

本論では、1978年から1984年までの議事録を翻訳、整理したもの [小山 1991] を資料として使つた。そこでは議事録を一日を単位にまとめ、一単位の冒頭に年、月、日を二桁でとつた6桁の数字をつけてある。本文では [] 括弧内の数字がそれである(たとえば [900726] など)。

II. マニングリダ・セツルメント

1. マニングリダの歴史

マニングリダ地区は旧アーネムランド保護区の中央部にある。この町はリバプール川の河口のグナビシ(言語)族の領地にあるが、地区のなかにはナカラ、ギジンガリ、ジナン、グナドバ、グニング、グンバラナガ、ヤンヤンゴなどの言語族の領地がある [HIATT 1965]。ただしこれらの語族名は、ギジンガリ族による呼称である。

マニングリダ地域についての記録は1819年にキング King が現在のマニングリダのあるリバプール川の河口を発見したのが初見である。その後、ブライス川(1866)、スチュワート岬(1875)、ブライスおよびリバプール川筋(1883)、リバプール川の水源地(1844)の調査などがおこなわれている。しかしいずれも船によるもので、宿泊のため上陸したかどうかも定かでない。

具体的な報告としては、1908年に宣教師のストラングマン Strangman が、「ワニ猟師や日本の真珠貝採集船が出没しているという噂があるのでリバプール川を上下して調べたが人影すらみなかった」というものである。ところが白人との接触は少なかったが、この地域には古くからマカサンと呼ばれるセレベス島のナマコ採り漁民 [MACKNIGHT 1976] や日本の真珠貝船の漁師 [THOMSON 1983] が訪れ、アボリジニと比較的親密な関係をもっていたのである。

広大な面積をもつアーネムランドが保護区に指定されたのは農牧業のために開拓するにはこの地の自然条件があまりにも悪く、それまでの開発の試みがすべて失敗に終わったためだった。しかし政府はこの地の植民地化の目標をすてたわけではなく、狩猟採集民のアボリジニを保護すべきだとする世論の中心だったキリスト教団体に彼らを同化させる責を負わせた。この政策にしたがってアーネムランドには1910年代から多くのミッションがつくられはじめた。マニングリダ周辺では、1916年にゴルバーン島(メソヂェスト派)、1925年にはミリンギンビ島(同)とオーエンベリ (Church Missionary Society) にミッション・タウンが設立された [ROWLEY 1970]。

初期のキリスト教ミッションはパシフィック・ミッションと呼ばれる。それはこの地域への陸路が未開発で、海路だけが利用できたためである。ミッションは航路によって拠点をづくり、食糧や衣料品の供給、白人スタッフの交代などをおこなっていた。オーエンベリは例外的に内陸に位置するが、これはダーウィンの皮革産業のためのワ

ニや野性化した水牛を狩る狩猟者の最前線であった。

1920年代にミッション・タウンができたことでマニングリダ地域にも白人があらわれはじめた。たとえば、トムソン Thomson はスチュワート岬付近に滞在して人類学調査にあたり、1939年にはメソヂスト派の牧師スウィニー Sweeney による住民の生活及び健康状態に関するレポートがでていいる。それによると、この地域には7つの言語族、545人のアボリジニがいた。

しかし、接触はアーネムランドの他地域と比べるとときわめて少なく、アボリジニからみると、白人の世界、つまりミッションへは自分たちからは簡単に接触できるが、逆はそうではないという地域として残されていたのである。古老の中には幼児期や青年期にゴルバーンやミリングンビにいたと語るものが意外と多い。

太平洋戦争はこの社会に大きな展開のきっかけを与えた。戦争の勃発とともにダーウィンが爆撃され、日本軍の上陸が予想されたため、オーストラリア政府はダーウィンを前線基地とする整備をはじめた。その結果、極端な人手不足が起こり、労働力としてアボリジニまで求められ、白人との人種的隔壁は（一時的にだが）取り払われることになった。この時アーネムランドから多くの若者たちが徒歩で（何日もかけて）ダーウィンに向かったという【松山 1990】。

アボリジニの保護区外への流出は戦後もおさまらず、大きな社会問題になる。その対策のために、1946年巡視官 (Patrol Officer) のカイリトルはこの地域の踏査をおこなっている【KYLE-LITTLE 1957】。そして、アボリジニの流失を止めるにはマニングリダに交易所 (Trading Port) を設立し、他のミッション・タウンと同じような近代的な町をつくるべきだと勧告した。その結果、交易所は1949年6月に設立されたが、予算ぎれのためその年の11月、雨期のはじまりとともに閉鎖されてしまい、この計画は消えたかに見えた。

ところが、1957年5月になると交易所が再開される。今回は十分な予算をとまう長期計画であった。これによって今日のマニングリダ・セトルメントの基礎が築かれたのである。マニングリダの特徴はその初期からハイヤットが調査に入り、その後もミーヤン Meehan, B., ジョーンズ Jones, R., ハミルトン Hamilton, A., アルトマン Altman, J. などの人類学者の調査が続けられていることである。1980年にはじまる私たち日本グループの調査もその一環といえることができるだろう。

1958年の調査では人口330人、滑走路、病院、いくつかの小屋があり、果樹園や野菜畑がつくられ、定期的な住民への食糧配給をおこなっていた。賃金労働者として雇用されていたアボリジニは57人であった。ほかに交易のためにワニ皮やパンダナス・

マットなどがもちこまれていた。

1960年には人口が480人となっている。内訳は、アボリジニはキジナガリ（ブラダ）46%、グナビジ15%、ナララ13%、グナドパ8%、ジナン6%、ガングラゴニ4%、グニング3%、ジャンジャンゴ3%、グンバラング2%である。他に10人の白人スタッフがいた [HIATT 1965]。

1962年になると、政府はマニングリダへの援助を強化し、アボリジニの雇用増進、職業訓練所の設立、農林業を起こし、工芸品生産振興などによりアボリジニ・セツルメントのモデルにしようとした。これはかつての同化策を捨てず、おしつけがましく独善的になりがちな隣接のミッションに対する批判でもあった。政府の肩入れによってマニングリダは急速な膨張をはじめた。

1966年の調査では865人（うち白人65人）、そして1971年には1100人（うち白人200人）にまで人口は増え、ノーザンテリトリー（州）第44位の人口をもつ都市に成長した [MEEHAN 1982]。この時、白人の数も飛躍的に増えている。そのため町には、他の町と同じような、白人優位の雰囲気が強まった。この頃からアボリジニはマニングリダを去って彼らの故地へと帰りはじめた。もちろん、それまでも彼らは自分の領地を放棄していたわけではなく、故地には老人が残り、交通の便が良くなる乾期になると、「休日」の里帰りを楽しむ形で帰っていた [MEEHAN & JONES 1980]。

マニングリダの発展は政府による重点的な援助によるところが大きいことはすでに述べた。ミーヤンによると、1960年代にマニングリダには基本プランに基づき町が建設され、空港、小学校（教員20人）、病院、スーパーマーケット、ファーストフード店、製材所、近代的設備をもった住宅、教会（牧師1人）などがあつた。そして1970年代にはアウトステーションの1つ、カデル（ゴチャンジンジラ）に近代農園の設立が試みられている。

またオーエンペリ、ラマンガニングの二つの近接セツルメントにつながる幹線道路ができ、ほかに管区内に製材工業用の道路網がつくられ、四輪駆動車やトラックなどの車が大量にもち込まれた。無線電話網もこの頃出来ており、基本的な近代装置は60年代末から70年代はじめに整えられたことがわかる。

2. マニングリダ地域のアウトステーション運動とその要因

集中化を続けていたアボリジニの突然の人口拡散の動きは1970年頃から顕著になりその後も強まる一方であった。1972年には11のアウトステーションに500人が住みつく状態になり、マニングリダの町の人口は半減してしまった。

当時、アウトステーションの設立を助けたのは1960年代末からマニングリダ行政事務所内におかれた支援機関、ORC (Outstation Resource Centre) である。ORC をつくりアボリジニの自立化を積極的に進めたのは当時のマニングリダの行政顧問 J. ハンターだったといわれている。ハンターは1974年にそれまで膨大化する一方だった白人を大幅に削減した。少数の行政スタッフ、教師、機械工など必要不可欠な人員を残し、他の白人をすべて解雇しセトルメントから追出すという革命的な決断をしたのである。これによってマニングリダはアーネムランドのミッション・タウンとは性格のちがう「アボリジニ主導」の町となった。そのためハンターの名は今日でもマニングリダで伝説的に語り継がれている。

マニングリダのアウトステーションが組織化される直前の1978年度のマニングリダの人口は700人、アウトステーションに600人、ほかに白人が100人いた。これは1984年度のアボリジニ省の調査による管区の総人口1242、うちアウトステーション人口630、白人約120という数値とほぼおなじ数値で、これがこの地域の安定した人口分布であり、アボリジニ対白人の比率であるといえる。

アボリジニ側からみれば人口拡散の主な原因は、1968年からの社会福祉金（失業保険はまだなかった）の支給によって彼らが貨幣経済に参加する資格を手に入れたためだといえるだろう。また、この頃東部アーネムランドのゴープ Gove にボーキサイト鉱山が開かれ、土地をめぐる、そこを領地とするイルカラ・セトルメントのアボリジニの訴訟が起こされた。その結果、1973年にはウッドワード委員会によるアボリジニの土地所有権が認められて、ゴープの鉱山権利金を受取り、同時に聖地を守る権利も保証された。これによってアボリジニにも土地を所有し、それを資産として利用できる見とおしが開かれたのである。

おなじく、1973年は DAA (アボリジニ省 Department of Aboriginal Affairs) が新設されている。DAA はアボリジニの貨幣化経済適応への援助 [PETERSON 1983] を進め、また保護区のセトルメントの経営もアボリジニ化する政策をとるなど、時勢はアボリジニ側へ有利に働いた。

マニングリダにおけるアウトステーション運動の比較的スムーズな動きは進歩的な考えをもった労働党支持者 J. ハンター氏のような人々のいたことも重要な要因であった。マニングリダでは、これらの人たちによって全国に先駆け1976年に管区にあるアウトステーションの詳細なインベントリーの報告が出版されている [GILLESPIE, COOKE & BOND 1977]。またその人脈は行政や美術工芸顧問要員としてその後も引き継がれている。彼らはかつてのミッションや同化政策の時代の思想を引きずりアボ

リジニを高圧的に教化しようと振舞うアーネムランドのミッションに反発し、アボリジニの自立のために協力を惜しまなかったのである。

Ⅲ. BAC の 設 立

1. BAC の組織化

会議録によるとアウトステーション評議会 (Outstation Council Meeting) の目的は「アウトステーション運動の継続とより一層の発展のために、アウトステーションの諸問題を扱う個別の機関を組織すること」であった。部族間の問題はアボリジニ社会にあってもっとも微妙なもので、これにあたって十分な根回しがおこなわれていたことが「各コミュニティで十分に話し合われた」「すでに存在するマニングリダ町議会からオブザーバーを呼ぶ」などの記録に示されている。

アボリジニの自立を進める制度、貨幣経済に参加する裏付け(社会福祉金と土地権)、交通通信を中心とした近代設備の整備、それを助ける白人グループという条件がそろい、1978年8月マニングリダにおけるアウトステーションを組織する機が熟したのである。この組織はアウトステーションの代表者が集まる評議会のもとに法人団体をつくり、白人顧問を雇用して、アウトステーション住民の生活全般を支援しようとするものであった。主な機能は(1) Mechanical Workshop: 車両、ボート、無線等の修理、(2) Social Security: 社会福祉金支給、(3) Resource Centre: 諸設備(井戸、住宅、道路、太陽電池等)の設置、修復、(4) Art & Craft Centre: 美術工芸品買いあげ、販売及び製作指導と書かれている。

2. 参加アウトステーション

第1回会議がひらかれたのは1978年8月31日である。乾期も半ばにいたり道路状態が安定し、人々の移動が容易になる時期を選んでいる。このとき集まったアウトステーションの数は16である。その内訳はガマディ Gamardi、カレドナ/ナモンバ Caledona/Namonba、ジマダ Jimarda、モメガ Mumeka、マルガリッドバン Markolidban、ブルガドル Buluhkaduru、ボルキアム Borlkidjam、ジバルバル Ji Bal Bal、コパンガ Gupanga、ゴロンゴロン Gorrong Gorrong、ウデジャ Wurdeja、ナンガロッド Ngankorlord、ガッチ Gartji、ナカワンジャラ Nakawanjarra、ゴッカバルバルディ Gokkababuldi、マルワン Malwnun である。カレドナ/ナモンバとマルワ

ンにはアウトステーションはなく、地域代表である。前者はマニングリダのすぐ東、後者は管区の西部、オーエンペリー管区との境界線付近をさす（図1）。

これらのアウトステーションの分布はこの地域のすべての言語族を含んでいるが、BAC 形成の初期段階では、5つの語族、ブラダ *Burada*、ウラキ *Wulaki*、グナドパ *Gunardopa*、レンバランガ *Rembaranga* とグナビジ *Gunavidji* である [800519] (図2)。これを前出のハイヤットと対照すると、ブラダはギジンガリでナカラも含む、ウラキはジナンの一分支である。レンバランガはグングラゴニであるが、より広くアーネムランド南部丘陵地帯まで領域をもつ語族である。部族間関係をみると、ブラダとグナドパの関係は密接で、ミーヤンは同一言語族とみなしている [MEEHAN 1982]。ウラキはこれらと関係をもつもののやや離れた位置を取っている。これに対し、レンバランガはグニングと親しく、前三者とは別グループをつくる。これを（海岸—河川）対（山）という住環境の差とみることが可能であろう。

アウトステーションの数はブラダ4、グニング4、レンバランガ4、ジナン3、グナビジ1だが、人口数では、ブラダとレンバランガが優勢である。ここではグナビジの存在の薄さが目につく。グナビジはマニングリダの町の土地所有者であるため数の少なさにもかかわらずマニングリダ町議会の実権を握っていた。マニングリダにおける数の多いブラダと土地所有者であるグナビジの歴史的な葛藤については、ハイヤットが詳述しているとおりである [HIATT 1965]。したがって、BAC の設立の意図はブラダを中心とする他の部族がグナビジから独立した組織をつくらうとしたのだということができらるだろう。しかし、グナビジをのぞいても、この組織がやはり多言語族の集合であることは変わらず、部族間の軋轢は続くのである。

3. 評 議 員

ここに記されたアウトステーションはそれぞれ2ないし3人の評議員を送っているが、その数が異なるのはアウトステーション住民の数もしくは近隣のアウトステーションをまとめて代表する（ジマダ *Jimarda* とマナカードカジリ *Manaka-dokajirri* が合同で *Jimarda* となる）等の事情を反映している。

評議会はかつての族長会議と同じ形をとったものだ、と現地の人はいう。評議員は伝統的土地所有者 (Traditional Land Owner) に限定されると明言されている場所がある [790405]。しかし代表者の顔ぶれをみるとすべてが土地所有者ではないことがわかる。

評議員を送りだすアウトステーションは明らかにホールドである。アボリジニのホル

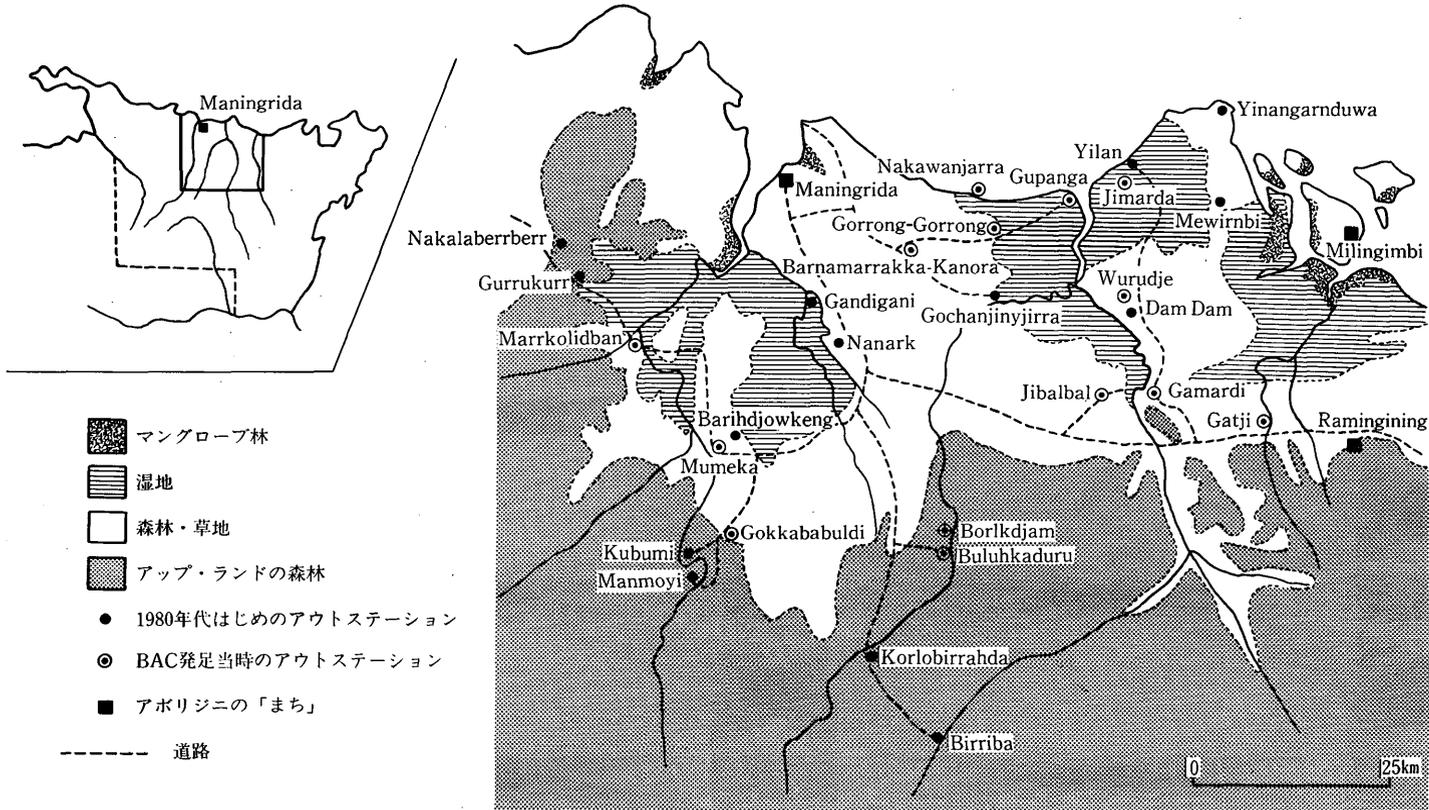


図1 マニングリダにおけるアウトステーションの分布

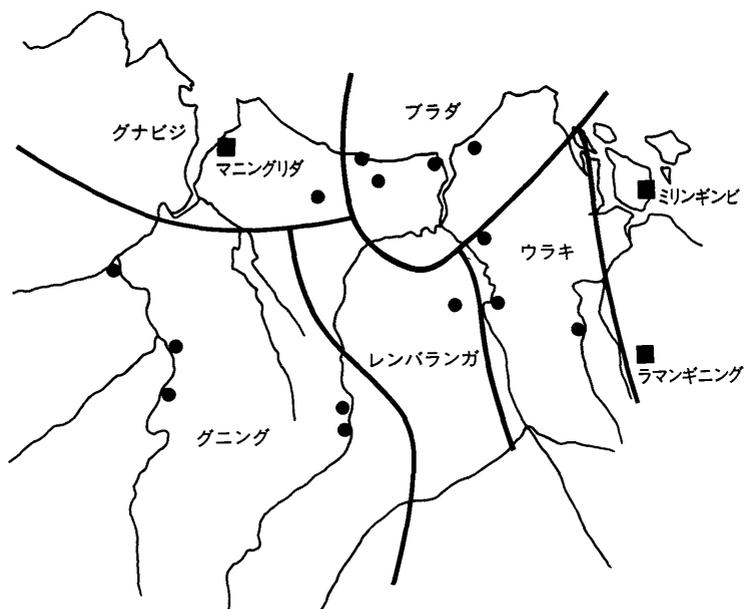


図2 マニングリダにおける主要部（言語）族の分布

ド集団はマドックの指摘するように一氏族の孤立化を防ぎ、氏族間の相互性を高める社会的（外婚）、経済的（狩猟など）、宗教的（聖地、生誕地）な混交のメカニズムがはたらき、その結果、ホルド内には常に二人のリーダーとなる可能性をもつ男が存在する [MADDOCK 1974]。マニングリダ地域ではこの二者を英語で、owner（ホルドの存在する領地の所有者）と、manager（ホルド外から来た指導者）と呼び分けている。この両者はしばしば対立し、ホルドの実質的指導者となったものがボス（boss）と呼ばれることになるが、実力主義（egalitarian）のこの社会では manager がそう呼ばれることが多い。しかし、このような両者の対立、あるいは並行はホルドの宿命ともいえるもので、それがアウトステーションから二人の評議員をだす背景になっていると考えられる。

4. 人事と部族

BAC の設立にあたってまず最初におこなわれたのが役員人事の選出であった。BAC の初期の段階ではブラダ、ウラキ、グナドバ、レンバランガが主体となっていたことはすでに述べたが、この4グループの微妙な力関係を役員人事にうかがうことができる。まず、議長の選出にあたって、レンバランガ族のジミー・S がウラキ族の

ジャック・Wにより指名され、ブラダ族のグヤ・Jが指名賛成者となっている。つぎに副議長はジミー・Sがグヤ・Jを指名し、それをウラキ族のムニ・Rが賛同している。そして書記にはブラダ族のマイケル・Bが同族のチャーリー・Gを指名し、イリ・B(参加者リストになし)が賛同している。

その結果、ブラダ2、レンバランガ1という2対立部族の構図ができた。ウラキは両者に影響力をもちながら裏にまわった形になった。この力関係はその後もほとんど変わっていない。

初代議長のジミー・S(レンバランガ)は79年11月ごろ突然、議長の職を投げだしてしまった。12月の全体会議を欠席し、チャーリー・G(ブラダ)が代行している。これに対し、ジャック・W(ウラキ)が「役員交代がこの時すでにおこなわれている」と指摘し、翌日コミュニティ開発顧問のヒューズから「ジミー・Sが家族の都合によりマニングリダを去り、自分のアウトステーションへ帰ることとなった、そのため彼は自分の職務について責任を取るという態度を明確にしたのだ」という説明があった。評議員は「各アウトステーションは彼の仕事に非常に満足しているので、まったく残念である」、「援助資金や土地問題で、ボーム(同部族の)が責任者でもないのにごねたのはよくない」、「早急に彼と同様に有能な人物を選出し、各アウトステーションへの年金支払いにとどこおりが生じないよう希望する」などのニュアンスを含んだ感想や説明があり、「新委員の選出は委員会に一任」におわったという議事録がある【791212】。ここには部族内のもめ事の他にレンバランガからブラダへの交代に背景があり、それにウラキがクレームをつけたという関係がうかがえる。

新役員は79年12月の全体会議で議長：ガウル・S(Malwnun グニング)、副議長：チャーリー・G(ブラダ)、書記：ウェイ・D(グニング)ときまった。しかし、書記のウェイ・Dが、都合により就任まもなく第1回目の委員会(1月17日)で辞任し、1月23日にテリー・R(不明)と交代した。しかし、これも80年8月の全体会議まで続かず、兼任の郵便係をも含めた職務怠慢で2月27日の委員会で免職される。その後クーパー・J(ブラダ)が3月27日の委員会でつぎの全体会議までの暫定書記に就任した。また、議長ガウル・S(グニング)にたいしても職務怠慢に対する辞任要求が8月の全体会議で提出され、結局8月9日の委員会で、すべての役員を全体会議で再選出することとなった。

5. 2人の若者

ジミー・Sの辞任以後BACの人事は極端に不安定になった。これはこの期の役員

の無能力も関係があるだろうが、ブラダとレンバランガの対立の中に弱小のグニンダの2人を入れたため起こった部族間のバランスが崩れたことに最大の原因があると思われる。そこで、つぎの全体会議（80年8月）で議長 チャーリー・G(ブラダ)、副議長カラ・J(レンバランガ)、書記 ゴル・C(ブラダ) がそれぞれ決まる。構成は再びブラダ2、レンバランガ1となり安定したのである。

その後、1984年までBACの議長はほぼ一年の任期で交代するが、実質的にチャーリー・G(ブラダ)とジミー・S(レンバランガ)の二人の間を行き来することになる。この組合せで交替をくりかえすことで部族間関係も安定したものになったのであろう。二人の若者は、いわゆる伝統的な社会での力はないが、英語が堪能で、事務能力があり、白人と対等にわたりあえる人であった。とくに、チャーリー・Gはオーストラリア南部の高校を修了しており、議長ばかりでなく、ダーウィン、キャンベラ、シドニーなどでおこなわれる各種会議や委員会にも派遣され、マニングリダの対白人折衝における切札的な存在に育っていった。

IV. BAC の 構 成

1. 組織化のプロセス

第一回の会議は機関の組織化に関する事務的な要件によってしめられている。団体の名称をきめ、役員を選出、法人化、予算、実質的な運営にあたる白人顧問（行政顧問 Community Development Worker）と美術工芸顧問（Art and Craft Advisor）の公募などを決めている。また全体会議は人数が多く、交通が不便なので回数を年四回（Quarterly）に制限し、実務を処理する委員会（Executive Committee Meeting）をつくり実務処理にあたることを決めている。

機関の名称についてはこれが多くの語族の集合団体であることから「共通語として英語名称にすべきだ」という意見があり、ORA(Outstation Resource Association)とすることになった。しかし、これでは特徴がなくアボリジニ性をより強く打ちだすべきだという意見がのちにでて、1979年12月の法人化にあたって最終的にBAC(Bawinanga Aboriginal Corporation)と決定した。Bawinangaは特定の現地語ではなく主要な4語族、Burada, Wulaki, Gunardopa, Rembarangaの部分をとり、複合したものである【800519】。

現代のアボリジニ社会の自治組織はオーストラリアの地方自治単位と同じで、市

(町) 議会 (Council), または郡 (Shire) という形がとられている。マニングリダにはマニングリダ町議会があるが、マニングリダ周辺のアウトステーションに住む諸部族がその自治と生活支援のために別組織をつくったものである。その結果 BAC は協同組織 (Corporation) という法人の形をとることになった。

第一回の全体会議では法人化にあたっての法的手続きは NAALS (North Australian Aboriginal Leagal Service) を利用すべだとの提案があり、全員の賛成をえて承認された。しかし、第二回目の会議【7904】で、法人の認可には州政府か連邦政府という2つの選択肢があり、NAALSを通じた場合州政府レベルでの法人となってしまうので登録手続きを一時中止したという報告があった。住民の一般感情は、州政府より連邦政府のもとでの法人化を望んでいた。それは後者の方がアウトステーション運動に対して同情的だといわれていたからである。この時は決定がもちこされるが、最終的には連邦政府レベルでの法人化が選ばれた。評議員の大部分が法人化についての明確な認識をしていないため会議は混乱している。アボリジニは言葉の解釈やおきかえて玉虫色になる白人の法律をうるさいとおもい、いらだって怒りだす場面が会議録にはしばしばあらわれる。しかし法人化のプロセスは意外と順調に進み、1979年7月12日には規約原案の作成ができ、同年10月には登記の認可があり、12月の全体会議でそれが報告されている。これによって BAC は独立組織として完成したのである。

2. 白人の雇用 1 — 行政顧問

第一回会議の重要な決定として事務をおこなう行政顧問を全国的に公募することとした。公募は労働省 (Dept. of Employment and Industrial Relations) からの協力をえて、所定の資格に基づき第一次の書類審査をおこない、適任者を複数選出する。最終審査はアウトステーション代表者会議でおこない、決定することにした。

コミュニティの開発顧問資格、業務内容、雇用条件は以下のようである。

給与は A \$ 13000-16000(年額) で、2年間契約、宿舍が提供され、契約終了後にアデレードまでの航空券を支給する。

業務は評議会の指示に従い、(1) 援助金申請、橋や道路の整備などの一般地域開発業務、及び経済、社会問題等について各アウトステーションに対するアドバイス、(2) アウトステーションを定期的に巡回し現場での協力、(3) 連邦政府及びその他の公的、私的機関とのスムーズな連絡体制確立、維持、(4) 社会福祉事務をおこなう。資格は、アボリジニとの意志疎通及び協力が可能で、簿記及び社会奉仕関係の経験を有し、組織運営の経験を有するもの、とある。

最初の行政顧問にはヒューズ氏が採用され、翌年4月全体会議で新任紹介をされている。ヒューズ氏はこの地域での就労ははじめてであったが、さっそく雨期の食糧配給用のボート購入、ORAの法人化の諸手続き、援助金の申請、現地スタッフの雇用などの仕事にかかっている。行政顧問としてのヒューズ氏は生真面目に過ぎると思えるほどの精勤ぶりである。会議は年に4回の本会議(Quarternary Meeting)、毎週1回の委員会(Executive Committee Meeting)をほぼ完全にひらき、それらすべてに出席している。いつも欠乏気味の資金の立替え払いをおこなうこともあった【801213】。

行政顧問の職がいかに重要なものとみなされているかはヒューズ氏に無線電話付きの専用車を与えることを決議していることによってわかる。行政顧問の給料は少なくともこの町の最高レベルにあり、供与される宿舍も立派なものである。しかしその特権がしばしばアボリジニに対する優越性とまちがわれることがあり、そのため「活動の中心となるのはあくまでも伝統的土地所有者(Traditional Land Owners)のアボリジニが中心であり、白人はこれを補助するにとどまる」との確認がおこなわれている【790713】。

ヒューズ氏は契約期間の2年で辞任している。任期の終わり頃にはなんとなくコミュニティの不平不満が多くなっている事が議事録から感じられる。それはほとんどの場合彼の責任ではなく、この社会の常態なのだが、つぎに述べるクック氏と違ってこのコミュニティに全く馴染みのない白人だった彼には、仕事が理想どおりにはかどらないことと激しい対人摩擦に疲れたのであろう。もっとも、短期間働きの金を貯めて南部の町に帰るのがフロンティア社会のやり方だと一般にいわれている。ヒューズ氏の後任にはボンド氏が選ばれた【810127】。ボンド氏はマニングリダの主任機械工としてこのコミュニティに長く住み、住民からの信頼の厚い人であった。

3. 白人の雇用 2 — 美術工芸顧問

もう一人の白人スタッフは美術工芸顧問である。美術工芸品の製作は現在のアーネムランドのアボリジニ社会にとってほぼ唯一の産業である。そのため、連邦政府は美術工芸の振興をめざし、美術局(Arts Board)をとおして白人顧問を雇う援助金をだしている。

BACによる募集条件は行政顧問とほぼ同じだが、給与はすこし低い。業務内容は(1)ACC(Art and Craft Centre)のための作品購入と市場調査開拓をおこなう。(2)外部市場からの需要に見合った供給を実現するために、各アウトステーションに於ける芸術作品製作の指導育成をはかる。(3)政府アボリジニ芸術局(Aboriginal Art

Board) と各コミュニティ間の連絡体制確立維持をおこなう。(4) 作品の市場開拓のための PR の実施。(5) マニングリダにおける美術工芸業務の監督および特に指示された業務を実施する。資格は、アボリジニ美術、工芸に対する知識を有し、芸術品販売、実務経験を有するというほかは行政顧問とおなじである。

美術工芸顧問にはクック氏がえらばれ、行政顧問のヒューズ氏と同時に新任紹介されている。クック氏はこの地域のアウトステーション運動に深くかかわった人[GILLESPIE, COOKE & BOND 1977] である。アボリジニには白人に対する不信感があり「これまで全く面識の無かった新任者の就任には不安を覚える。……(中略) ……すでに何年にもわたり、我々及びこの地域とかかわりの深い人」[801110] がのぞましいという感情がある。もっとも内輪だけでの人事の弊害も充分知っており、ヒューズ氏とクック氏はその両方のバランスを考えた採用だったと思われる。

クック氏は全体会議や委員会にはほとんど出席し自分の分野だけに限らずアウトステーションの雇用促進、施設の充実、サービス改善などについて活発な発言をおこなっている。委員会の記録からも明らかなように、クラフト・センターはアウトステーション住民の生活と密接な関係をもっている。前述したように行政のきしみやそれにとまらぬ予算や基金の不足に悩みながらもできるだけ製品を買いあげ、現金や小切手を手渡しているからである。委員会でのクラフト・センター関係の支払い承認の記録が多いことがそれを示している。

また、美術工芸顧問は専用車をあたえられ、定期的(2週間に一回)にアウトステーションを訪れ作品を買い付ける巡回(craft run)をおこない、木皮画その他の素材集めもてつだう。クック氏の仕事ぶりに対するアボリジニの信頼は高く、任期中に昇給するべきだとの声が評議員からでていた。これは次期の美術工芸顧問が住民の不満の声によって適正にかけるとされ任期中に解任されていることと対照的である[840126]。

芸術はアボリジニ社会の公的な顔となっている点が重要である。美術工芸顧問は都会で展覧会を開き、芸術家に同伴してでかけ、紹介する、マニングリダの店に来る客をもてなす、客の入域許可をだす、遺跡や遺物の保存をはかるなどの精力的な活動がそれを示している。しかし一方で聖地や道具(美術工芸品)は彼らの伝統、信仰、儀礼と深くかかわっている。そのため、「ダーウィンで開かれるフェスティバルに出品するために、誰かが自分の名前を利用してグナビビ儀礼用のブル・ローラー(Bull Roarer)をもちだしているらしい。この事についてなんら知らされておらず非常に迷惑している」[790403] といったトラブルが常に起こる。グナビビは成人通過儀礼の

一種で「秘儀」とみなされるものである。しかも、それに使用される儀礼用具であるうなり板（ブル・ローラー）は、楽器の一種で、聖霊を呼ぶことに用いられる。通常これを関係者外に公開することなど考えられず、アボリジニの間では女性に絶対にさわらせないというものである。美術工芸顧問には、そういった事情をふまえ、かつ尊重しながら業務を進める能力と努力が常に強いられているのである。

クック氏の特筆されるべき仕事のひとつに、ジョミ Jomi 博物館の建設がある。博物館設立の提案は79年度7月にだされ、8月には「規約に沿った形で博物館を設立し、石斧、木皮画、カヌー、漁網、ヤナ、棺、写真、文献等の保管展示をおこなう」ことが委員会で決定された【790823】。これは各コミュニティとダーウィンの諸機関に広報され【790912】、12月の委員会で博物館活動の基本方針ほかのアウトラインがきまった。それらは、業務内容、専従スタッフ数、設立理念、無給原則、運営委員会などである。運営委員は、伝統に深い知識と理解をもつ高齢者の男性で、この地域全部族の半族であるイリチャ Yirritja 及びドゥワ Dua 両方から任命する。また女性関係の品を担当するための女性運営委員会も設立された。

博物館の名、ジョミとはマニングリダにある美しい泉で、水中の子供が母親の胎内に入る場所とされ、女達は（必要時以外は）近寄らないというグナビジの聖地である。

この小さな博物館はダーウィンの新聞に大きく報道され、それまで計画ばかりで実施の進まなかったノーザンテリトリー州立博物館の設立を実現させる役割を果たしたという。今日ではマニングリダの人々の誇りとなっている。

V. 議題にあらわれた住民の関心

1. 主な議題

BAC という機構に対して住民が何を期待し、組織がそれにどう対処した、またはしようとしたのかは会議録の議題に明確にあらわれている（表1）。住民の関心が生活の改善向上にあることはもちろんで、話題は多岐にわたっているのだが、それらはほぼ経済、通信交通、伝統という三つのカテゴリーに集約されるようである。食糧、医療、教育等の問題も多いが、それらは上記の三つのカテゴリーと密接に関係している。もちろんこの三カテゴリー自体も互いに切り離すことのできないものである。

2. 小切手 (check)

この地域の貨幣経済はその大部分が政府による社会福祉や援助に基づくという特徴がある [ALTMAN 1987]。少数の雇用者を除いてほとんどの住民は失業保険、老人、寡婦、養育などのいずれかの保障金を受け取っている。また BAC の組織そのものも地域援助金や改善基金の上に成立しており、これには白人顧問をはじめとする被雇用者の給料も含まれている。

会議録にあらわれる頻度の多い言葉に小切手 (check) がある。福祉金は小切手でわたされ、その現金化はアウトステーションに半月 1 回の福祉金の交付のための郵便の巡回 (Mail Run) 時、あるいはマニングリダの本部事務所でおこなわれる。その現金化に関して数多くの苦情が寄せられ、委員会では改善方法が議論されている。これはアウトステーションでは小切手がうまく現金化できず、しばしば行方不明になる。しかも行方不明のものはだれか別人によって現金化され使われてしまう [790403] という事件が多発したからである。盗難や使い込みの例もある [841020]。

これに対しては配送の期日を正確に守り本人に確実に手渡す [790403]、現金化する人を信用できる人に特定する [790711]、小切手係を増やす [790830]、雇員は必ず時間内は事務所にいる [841020]、特別基金を設け支払いの遅れがないようにする [800904]、などの改善が苦情のでるたびに試みられている。

このような問題のおこる原因は人材不足と制度の不備がまずあげられようが、より重要なのはアボリジニ社会のあり方そのもの、すなわち社会的要因が最も大きな問題である。つまり彼らの経済は親子、夫婦をはじめ全親族の関係が互いに寄り添い助け合うという互酬性経済で、個人を主体とした貨幣経済となじまない。さらにこれにあまりな時間と広大な空間の要素が加わる。彼らの移動は激しく、郵便トラックがアウトステーションに着いた時、町や他のアウトステーションにでかけていたり、狩りや採集にでかけていて受け取れないことがしばしばおこる。したがって不在の人を(もっとも近い関係の人が) 代行するのは当然のことであり、実際的だといえる。問題はその後、代行人が小切手や現金を紛失したり、転用(しばしば浪費)してしまうことが多いのである。特に伝統的な経済観念からは、そこにあるものについては親が子のものを、夫が妻の物を利用する(その逆も可)のは当然という見方があり、いない人はその時点では一応必要としてはいないのだから必要とする人が一時的に借用し、いつかの機会に返済すればよいという論理がある。

しかし貨幣経済の基本はあくまで個人を主体とし、現在では貨幣が食糧や衣料とい

表1 BAC 会議に取りあげられた議題の頻度

1. 全体会議		2. 委員会	
話 題	頻度	話 題	頻度
車	20	会計	35
アウトステーション	17	雇用	23
ショップ	12	車	21
道路	11	委員会	18
年金小切手	9	許可・訪問者	13
無線	8	書簡	11
保健・医療	8	賃金	10
白人	8	年金小切手	9
訪問者	7	道路	8
雇用	7	アウトステーション	8
聖地	7		

った生活必需品と一体化しているためにおこる問題だといえるだろう。

小切手の手渡しや現金化をアボリジニがおこなうと、このような人間関係のしがらみが強くかかり、うまく対処できなくなることが多い。そのため、この社会ではアボリジニ自治への強い希望にもかかわらず、中立的で機械的に規則を守ることのできる白人が必要とされるのである。アボリジニ自立の理想を追いすぎるあまり、白人を排除したあと、事務が完全に混乱し、破産状態に追い込まれたコミュニティの例もある [杉藤 1990]。しかし、議事録を年代的にたどると小切手の問題は徐々に整理され制度的にも整えられていることがわかる。現代生活にかかすことのできない個人主義の確立あるいは旧来の人間関係をたち切ることは、福祉金支払い小切手による貨幣経済の浸透により促進されていったということができらるだろう。

3. 基金, 援助金

アウトステーション住民の生活環境を改善するには政府からの援助金が不可欠である。援助金はかつて全額が連邦政府 DAA からでており BAC に対して年間150万ドルが支出されていた [810324]。BAC はそれを資金としてアウトステーションに対する諸設備の整備をおこなっていた。初期には、車、ポート、無線、水ポンプ、建材などを各アウトステーションの要求にしたがい基金を DAA に申請、獲得して遂行していた。一件の額は2000-4000ドルの範囲である [820228]。

アボリジニに対する援助や基金のあり方は政治経済の動きに大きく影響され、一定していない。政策や法律を白人側の都合でくるくる変えることについて、アボリジニ

側からはいらだちの声があがる [810324]。たとえば79年には DAA が、援助金に関して政策の変更をおこなっている。これはアボリジニが援助金で購入した新車をすぐにぶつけ壊してしまうなど有効利用されていないのではないかという白人（世論）によると説明されている [790710]。

また、連邦政府からの資金提供を、地元の州政府（1978年、ノーザンテリトリーの自治が認められたことによる）に移そうとする動きがある [790711]。

連邦政府のアボリジニ援助特別基金（Aboriginal Benefit Trust Account）の資金の枯渇、政府に支払われるウラニウム・ボーキサイトの鉱山採掘料によってまかなわれるアボリジニ権利保護団体の NLC(Northern Land Council) を設立し、援助を一本化しようとする動きもある [790803]。芸術局の援助は続けられているものの常に資金不足が話されている [8002, 820323]。

しかしそういった資金源の一本化の試みは連邦政府と州政府、さらには各省や現場の役人の思惑が既得権争いを引きおこし、混乱し、結果的にはかえって窓口の多様化が起こっている [8008]。しかし、全体としては援助の要望は当初アウトステーション（時には個人）ごとにそれぞれ提出されていたものが、いくつかのアウトステーションを結んだ地域的なものとなり、さらにマニングリダ管区全域のより大きな（儀礼用トラック、無線本部、食糧配給用飛行機、アウトステーションの恒久的母屋）単位へ、つまり個人的なものから社会的なものへという方向に動いているのである。設備の充実とともに全体的システムの整備へと動いていることがよみとれるのである。

4. 車

会議録に最も多くあらわれる言葉、すなわち住民の関心が最も強いものは車である。道路らしい道路がなく、雨期の長く続く砂質や泥沢地、川の多いアーネムランドのアウトステーション運動の展開に最も重要な役割を果たしたのは四輪駆動車とくにトヨタ・ランドクルーザーであったといわれている。それまで独占的な存在であったランド・ローバーに劣らぬ機能を持ち、改良への対応が早く、しかも値段が安かったからだ。

BAC の主な活動のひとつに食糧や年金の配達がある。これは公用車によってマニングリダから定期的に運ばれ、住民の生活を保障した。トヨタが安価であることによって公用車の台数が増え配達効果が改善された。住民達はコミュニティ用にトヨタを購入し、狩猟や採集に対する投入人員を増やし、活動範囲を広げ、時間を短縮させ、この伝統的な活動を活発化させた。それとともに、食糧をはじめとする生活必需品を

買いに随時マニングリダのマーケットを訪れることができるようになった。アウトステーション間の行き来が簡単になり、儀礼活動が盛んになり、廃れかかっていた儀礼が再興された例もある。

正常に動く車をもつかもたないかはそのアウトステーションの命運を握っており、リーダーの力の尺度となる。そのような状勢の中で公用車やコミュニティ所有車の使用、所有権利、個人使用をめぐる揉め事は絶えない [791210]。

はじめ DAA は、アウトステーションに車をもたせる方針をとった。そのため四輪駆動車の数は着実に増え、アウトステーションにひととおり車が行きわたったという判断によって、DAA はトラック購入の申請を受け付けないと方針を決めた [810325]。これに対して住民たちはコミュニティの全員が貯金をして車を買ったり、有名画家は芸術局の援助金を受け、さらに絵の売りあげを加えて車を個人用に買い入れるなどの例が見受けられる [松山 1990]。

この社会での車もたらす最大の問題は飲酒運転、無謀運転である。この二つは密接に絡み合っており、買ったばかりの新車をぶつけて壊してしまうという白人の批判もこれに深く関連している [790710]。それでなくても道路状態が悪いため車がいたみやすく、遠隔地ゆえに部品のそろわない地域での車の整備は大変な仕事である。BAC の主な業務のひとつが車の修理 (Mechanical Workshop) であることは、当然だろうなずける。

さらにボートについても車と同じ範疇に入れてよいだろう。雨期 (12—4 月) に入ると道路が使えず、孤立するアウトステーションが多い。その時期、食糧や年金の配達業務ボートが車に変わる。また海岸部のアウトステーションでは漁業活動になくはならないものである。さらに1983年には BAC は専用セサナ機を購入し食糧配達の効率化をはかっている。

5. 道路と滑走路の工事

車利用と密接に関係しているのは道路である。アウトステーションの周辺及び幹線道路を整備して欲しいという要求は非常に多く、会議において論じられる頻度ももとも高い。したがって工事は BAC の主要な仕事のひとつとなっている。道路問題がこれほど話題にのぼるのは工事が雇用にも関係するためである。この地域の道路は自然の地形に沿って地表をグレイダーで引っかくだけという簡単な工事が多い。しかし次第に (地質状態の悪いところでは) 土砂を入れ何層もに分けて固めるという手の込んだ工事がとられるようになった。しかしアスファルトによる舗装はしない方針だと

いう。動物の棲息域分断の問題があるからである。したがって住民達は整備された道路を望んでいるが、ダーウィンとノロンボイを結ぶアーネムランド・ハイウェイの建設には強く反対している [790404]。

雨量の多いこの地域では雨期の間はほとんどの道路が水浸しになり、いたみが早く、たえまない修繕や手入れが必要である。BAC は援助金によって道路工事に用いる機材をそろえ、ロード・ギャングと呼ばれる集団を組んでこれに対応している。

道路工事は（他の公共事業と共に）80年から費用負担が連邦政府から州政府に移管され、81年には州政府による道路工事がおこなわれたとき、その区間は公道となるという公式見解がだされている [810324]。そのためアウトステーション周辺の私道に類する場所は各コミュニティが独自におこないたいという意見がでている [821208]。

交通に関してもうひとつの問題は飛行機及び滑走路である。滑走路は非常時と雨期の物資輸送のために不可欠のもので、アウトステーションの建設時にはこれを優先したという [松山 1990]。滑走路の建設はこの地域としては大型プロジェクトで、1982年にはジバルバル・アウトステーションにつくられたものは1万ドルをこえる予算が使われている。コミュニティに実益のある設備に対しては土地問題に神経質な住民も反対することはない。

6. 無 線

車、ボート、飛行機が人や物資を運ぶものならば無線電話（Radio Telephone）は人類学者のトムソンやミッションが利用した記録が示すようにアーネムランドでは早くから定着していた通信手段であった。アウトステーション運動の定着にも無線電話は大きな役割を果たし、DAA の援助品目でも優先的取扱を受けている [791210]。車が一般化しなかった頃は、緊急連絡用としてアウトステーションの必需品であった。したがって、無線が議題にのぼる回数はめだって多い。電源は自動車用のバッテリーを使っていたが、のち、半恒久的な太陽電池の設置が進められた [800117]。

筆者の経験では無線電話は一日中付け放しにされ、常にどこかで誰かが話しているのが聞こえる。これはアボリジニが一見無駄で単なる娯楽とも見える雑談によってさまざまな情報の収集をはかっていることがわかる。アボリジニの情報に対する感覚は独特のものがあるらしい [久保 1990]。無線電波の届く範囲は狭く、利用できるサイクルが限られているため、緊急時にはコミュニティ間のリレー通信がおこなわれることがふつうである。1982年には常時受信ができるように BAC にオペレーターと技術者をそろえた無線本部をおくことが提案されている。

7. 聖 地

土地に関する問題もしばしば取りあげられている。「土地はわれわれのものであり、土地権法以前のように白人の勝手な利用は許さない」というのがアボリジニの明確な主張である。そのあらかののひとつに入域許可の問題がある。これは、アウトステーションや領域内に入りたいとき、訪問希望者はBACにその目的、滞在期間を明確にして書式による許可申請をおこなうこと、訪問の対象となるアウトステーションの指導者と合議の上、認可の可否、さらに認可の条件等を決め申請者に書式返答をおこなうという決定による【790404】。これはほとんどの場合対白人用のものであるが、アボリジニの間でも、他人の領域への侵入問題が論議されていることもある【800904】。特に、人類学者、写真家、ジャーナリストには神経質になり、ボスの利害や面子もあって、もめることが多い【790711, 12】。問題があまりに微妙なので責任者の白人顧問は「アボリジニ自身が決めるべきこと」と逃げをうっているほどである【800528】。

アーネムランドには多くの聖地があり、聖地は彼らの宇宙観（ドリーミング）、すなわち「生」そのものと深くかかわっている【MADDOCK 1974】。土地権法も経済的な面とともにこの精神的な側面が根本にあった。聖地について、州政府は1981年7月に聖地委員会（Sacred Site Commission）を設置している。その目的は現地で聖地を調査し、登録しようとするものであった。この時、住民は部外者の無断侵入を防ぐため、登録聖地に表示版を立てることを要望している。

しかし翌年になると突然、聖地保護局は廃止され、聖地保護法にかわり文化遺産保護条例が新機関の下に発効された。この変更の狙いは聖地ならば当事者以外さわれないが、文化財遺跡（Site of Significance）ならばその土地を利用したい場合政府は土地所有者と交渉し、さらには決定に所有者を従わせることが可能になる。その結果、白人がアボリジニの土地で法を犯すことなく活動できるからである。これに対し、アボリジニはこのような変更が現場のアボリジニ関係者からの意見聴取もなく、行政機関の最上層部でいつも決定されてしまうことに強い不満を表明している。そして、彼らは言葉の言い替えて内容が全く代わってしまう実情を人々、特に高齢者に説明し理解させるのは難しいし、結局アボリジニ領地内での白人の活動を認めることになる、と怒るのである。しかし、政府は住民の意見は尊重するといいつつもその目的は遂げてしまう。

ところで、土地利用は道路、水資源、滑走路などの設備の近代化ときりはなせない問題である。実利的な利用に関しては、21マイルポイント検問所【800806】、空軍測量

所 [820728], ジバルバルの滑走路 [820430] 等の例にみられるように彼らは特別な聖地を除き土地を提供することにやぶさかではない。しかし、政府関係者はしばしば正式の手続きをおこたるのでコミュニティからの苦情が絶えないのである。

問題が紛糾するのは経済的利益が大きくなる場合である。公的には彼らは、アーネムランド・ハイウェイの建設には反対していることからわかるように鉱山開発や領地の観光地化に対しては否定的である。しかしそこから入る巨額の権利金はコミュニティにとって魅力的であることも事実だ。

1981年11月に NLC から鉱山開発用土地借用申請があった時、議長チャーリー・Gより、NLC からの土地借用申請（鉱山開発用）に関する書簡が発表された。これは、この問題につき NLC はあくまでも該当地区の所有者の意志を尊重し、所有者側からの認可が無い限り申請に対する許可はおこなわないという確認に基づくものであった。この申請要請に対し、討議があり「会議に出席している伝統的土地所有者」はいかなる鉱山開発をも望まず、又認めないことが決議されている。しかし、1984年1月オーエンペリからマニングリダにかけての地域での鉱山開発の問い合わせがあった時の会議には該当地域のアウトステーションの土地所有者は欠席している。これはその場の議論の様子からみて故意に欠席したものらしい。伝統と金銭欲の間で悩む企業家 entrepreneur であるアウトステーションのリーダーの苦悩ぶりが目に見えるようである。

VI. 結 論

1. マニングリダ管区のアウトステーション運動

アウトステーション運動の勃興の原因についてクームス [COOMBS 1978] は、土地への権利と愛着、セトルメント環境、白人への反感という三つの要因をあげている。

アルトマンはこれをプッシュ・ファクター (push factor) とプル・ファクター (pull factor) としてとらえ、押しだす原因はセトルメントの生活をきらったこと、引き付けた原因は鉱山開発によって現金が入るようになった現状や可能性をこめて領地を守ろうとするアボリジニの意識であるとし、この動きを円滑にしたのは労働党の後押しだったと述べている。

マニングリダ地域でこの3つの要因にかかわる問題を会議録を中心に考えてみることにしよう。

アボリジニの土地への愛着、関心はまことに強く、マニングリダ地域のアボリジニ達も自分の生まれた地、父母、祖父母から伝わる土地をカントリーと呼び常にその素晴らしさを語る [小山 1987]。一般的にはカントリーは個人ではなく部族、氏族、親族など集団に所属している。ところが政府は国の法に従い、土地の所有者を個人に固定してその所有権を認める方針をとった。その結果、ホールド所在地の伝統的土地所有者 (Traditional Land Owner) と、ホールドの指導者である伝統的土地管理者 (Traditional Land Manager) との土地の認識にズレが起こり、それがしばしば抗争の種になる。なぜなら、後者が日常的、実質的なものであるのに対し、前者は名目的である場合が多いからである。そのためアウトステーションはたえず崩壊、分裂し新しい建設をくりかえすという効率の悪い状態が続く [790402]。

マニングリダ地域は現在まで一般人の立ち入りを厳しく制限しており、鉱山や観光など土地が貨幣経済にかかわる例をあまりみない。しかし、アーネムランド西部のウラニウム鉱山に領地をもつグニング族では、土地所有権問題が表面化しはじめており、それが将来部族内 (あるいは間) 摩擦を激化させることが予想できるのである [841011]。

つぎにセトルメント環境の問題はどうだろうか。「マニングリダとアウトステーションはどちらがいいか」という問いに、人々は「もちろんアウトステーション」と答える。静か、食物がうまい、自分の言葉が話せる、子供は健全な環境に育ち、他部族や白人がいらないなど自分の土地に住む自信とやすらぎがよくわかる。たしかに、BAC 結成の大きな動機のひとつはマニングリダを領域とするグナビジの主導とその摩擦から逃れようとする諸部族の努力であった。ところが、できあがった組織はやはり多部族の集合体であり、役員人事に象徴されるように部族間摩擦はやはり起こる。もともと、アウトステーションをつくるホールドは外婚制をとるため複数部族からなる。そして、親族間の抗争はときには殺人にまでいたる激しさのあることはハイヤットが明らかにしたとおりである [HIATT 1965]。したがって他部族との摩擦をさけるという点については、アウトステーション運動はなんらの解決をももたらしていないといえるであろう。

BAC はアウトステーション運動を定着させるという大目的をもっているため、会議録にはアウトステーションの生活を否定するような記事はほとんどみえない。マニングリダについては「ひどいところ」、「うるさい」、「少年非行」などという否定的な言葉を聞く。しかしそれとはうらはらに彼らが都市的な生活に次第に引き戻されている徴候は枚挙にいとまのないほどある。

車はマニングリダへの往来を容易にしたが、車が確保できるとかえってマニングリダに住の拠点が多くなる。都市化は僻地の過疎化をもたらす、僻地がリゾート地化するの世界的な動きである。アウトステーションも結局はこの道を歩むのかもしれない。そのなかでベトロスニッフ（シンナー遊びに似たもの、ガソリンをかぐ）の非行少年の保護や、禁酒、都市の生活につかれた若者の休む場所としてアウトステーションが効果をあげている点は注目される。

最後の要因である白人に対するアボリジニの感情は複雑である。アウトステーションは基本的に白人を排除しており、事実白人を見ることはほとんどない。BACはアウトステーションに入るには伝統的土地所有者の許可を必要とする規則を決めている。今日では白人（政府の役人であっても）には案内人がつき、みやげを持参し、リーダーに礼をつくし、用がすめばただちに去るという行動が定着している。

しかし、現在のアボリジニ社会が白人なしでやっていけないことも事実である。第一は人間関係における白人の中性的な性質で、それは小切手の現金化の項でみたとおりである。第二はやはり技術であろう。BACの結成にあたって行政と美術工芸分野の白人顧問の雇用がまず決められている。福祉金や援助金にたよるこの社会では、それにとまなう事務（文書作成、経理）がこなせるアボリジニは皆無に近い。同様のことは教育、医療、機械（自動車修理、発電機）の分野にもいえる。たしかに、事務補佐、助教諭、看護婦、自動車修理工などの分野で人材育成に努め効果をあげつつあることも事実である。白人の助力はいましばらく必要であろう。

マニングリダ地域のアボリジニは、白人との接触という点では幸運であるといえる。1970年代からの進歩的な考えをもつ白人が存在し組織を支えているからである。美術顧問のクック氏、二代目の行政顧問であるボンド氏などは長くコミュニティに住み、住民の信頼をえている。また、かつての関係者が州議会議員、政府機関、博物館、大学などで活躍しており、シンパとしてマニングリダを支えていることも会議録にしばしばみえるところである。

2. 近代化と貨幣経済への適応

クームスのあげた要因である土地、都市化、白人という三点をめぐる問題についてマニングリダ地区の住民は、ある程度はその解消に成功しているといつてよい。しかし、本質的にはこれらは現代アボリジニ社会の形成過程で複雑に絡み合いながら刷りこまれてしまったものであり、将来も彼らが抱え続けて行かなければならない問題だということがわかる。BAC会議録はこの地域の人々の試行錯誤の跡を如実に示して

いた。現在のアボリジニのこうした試行錯誤を支えている原動力が何であるのかということは、個々の要因をあげてゆくことによってではなく、アボリジニ社会の近代化、とくに貨幣経済への適応への努力としてとらえることによってより明確に見えてくるのではないだろうか。

アボリジニは公的には野生への回帰、伝統の遵守を強調しており、理想主義的な世論もそれを支持している。しかし、アボリジニにも快適な近代文明への憧れがあることは否定できない事実である。ミッション・タウンがつくられたとき、彼らはそこへ蟄集し、第二次大戦時の人手不足に応じてダーウィンへ大量流出し、戦後もそこを去ろうとしなかった。現在でも「伝統的な」アウトステーションの生活を老人はともかく、若者はきらっており、セツルメントさらには都市への流出がやまないことはアウトステーション在住の人口が老年・幼年層に偏重している事実にあらわれている [小山 1988]。アウトステーションには雇用機会がほとんどなく、住民の切実な願いにもかかわらず将来その可能性もほとんどない。生活は老人優位の世界である。したがって青少年や中年層の多くはマニングリダに住み、さらに青年はもっと自由な大都市ダーウィンへ向かう。アーネムランド東部では生活の拠点はセツルメントにおき、週末や休暇に帰りアウトステーションをリゾート化しようとする動きがある [杉藤・窪田 1986]。そして伝統的生活を具現すべきアウトステーションにも発電機を入れ、電灯、ビデオ、冷蔵庫をはじめとする多数の近代商品を買込む行動がみられる [松山 1990]。特に女性に顕著にみられる、われわれには単なる浪費としか見えない、衣料、化粧品、子供用おもちゃ等の買い入れ行動も [KOYAMA 1991; KUBOTA 1991] そのひとつとみてよいであろう。

こういった矛盾に対してアボリジニは「豊かで快適な生活を送りたいとは誰もが願っていることである。われわれの目指すのはそれが白人社会のコピーではなく、伝統的な社会の上に構築された近代狩猟採集社会とでもいうべき新しい形なのだ」と語る。

産業のないこの社会で、これを実現する可能性を示したのが社会福祉による現金経済への参加だといえるだろう。アルトマンはこれを福祉国家の狩猟採集民 (Hunter-Gather in Welfare State) と定義している。福祉を経済的基礎として新しい形の狩猟採集社会が構築できるという認識は正しいといえるだろう。

1988年の谷ロシンポジウムで明らかにされたように現存する狩猟採集社会はアメリカ、カナダ、オーストラリアをはじめとする社会福祉に厚く守られた社会、東南アジア、アフリカ諸国の国家の保護が及ばず自然な状態で放置された社会の二つに分かれるようだ。そのどちらが正しいかについては、それぞれの国の事情があり私たち部外

者が判断することは難しい。アボリジニ・セツルメントで長く働いている白人は「いま世界中の社会は河の流れのように激しく変わりつつある。しかしアボリジニにとってそれは河ではなく、ナダレにちかい。彼らは果して耐えうるのだろうか」と心配そうだった。マニングリダの将来を背負っていると期待されるチャーリー・G氏が日本にきたとき、車の多さ、町の整備ぶりに目を見張っていた。「マニングリダと比べて…」と問いかけると「someday…いつかきっと」と明るく答えた。この二人の答えの自信の差は印象的であった。わたしはチャーリー氏の態度に望みをかけたと思う。

狩猟採集民を少数民族のひとつとしてみる時、オーストラリア政府の対応は、数多くの問題を内包しながらも、真摯であり、時には過剰なまでに徹底的である。アイヌ問題をはじめとする現在の経済大国の日本の少数民族対策を見る時、我々は十分その責を果しているかどうかを考え、忸怩たる思いがする。

文 献

- ALTMAN, J.C.
1987 *Hunter-Gatherers Today: An Aboriginal Economy in North Australia*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- BERNDT, R.M. (ed.)
1977 *Aborigines and Change: Australia in the '70s*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- COOMBS, H.C.
1974 Decentralization Trends among Aboriginal Communities. *Search* 5(4): 135-143.
1978 *Kulinma*. Canberra: Australian National University Press.
- GILLESPIE, D., P. COOKE and D. BOND
1977 *Maningrida Outstation Resource Centre, 1976/77 Report*. Milingimbi: Milingimbi Literature Production Centre.
- GRAY, W.J.
1977 Decentralization Trends in Arnhem Land. In R. M. Berndt (ed.), *Aborigines and Change*, pp.114-123.
- HAMILTON, A.
1981 *Nature and Nurture: Aboriginal Child-Rearing in North-Central Arnhem Land*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- HIATT, L.R.
1965 *Kinship and Conflict: A Study of an Aboriginal Community in Northern Arnhem Land*. Canberra: Australian National University Press.
- 小山修三
1981 「狩人の領土からーオーストラリア・アーネムランド紀行」『季刊民族学』15: 32-44。
1983 「親族ゲームーオーストラリア・アボリジニの世界」『季刊民族学』24: 100-112。
1985 「アボリジニの英単語」『季刊民族学』33: 6-19。
1987 「アボリジニの対日感情」『季刊民族学』41: 26-33。
1988 「オーストラリア・アボリジニ社会再編成の人口論的考察」『国立民族学博物館研究報告』13(1): 37-68。

小山修三 (編)

- 1991 『マニングリダ・パウィナンガ・アボリジナル・コーポレーション会議録』オーストラリア研究資料 I 平成2年度文部省科学研究費補助金(国際学術研究)共同研究成果報告書。

KOYAMA, S.

- 1991 Petty Commodity Production in the Central Australia. In T. Matsuyama & N. Peterson (eds.), *Senri Ethnological Studies*, no. 30: 47-66.

久保正敏

- 1989 「不惑のフィールドワーク」『民博通信』46: 63-79。
1990 「続・不惑のフィールドワーク」『民博通信』47: 48-69。

KUBOTA, S.

- 1991 Wommen's Craft Production in Arnhem Land, North Australia. In T. Matsuyama & N. Peterson (eds.), *Senri Ethnological Studies*, no. 30: 31-46.

KYLE-LITTLE, S.

- 1957 *Whispering Wind: Adventures in Arnhem Land*. London: Hutchinson.

MACKNIGHT, C.C.

- 1976 *The Voyage to Marege: Macassan Trepangers in North Australia*. Melbourne: Melbourne University Press.

MADDOCK, Kenneth

- 1974 *The Australian Aborigines*. Penguin Books Australia. (マドック, K. 1986『オーストラリアの原住民』松本博之訳 勁草書房。)

松山利夫

- 1989 「狩猟採集社会の文化変容—谷ロシンボジウム民族学部門第12回「危機に立つ狩猟採集民」から」『民博通信』46: 53-56。
1990 「アーネムランド・アボリジニの生活史—ジナン族ガマディ・アウトステーションに居住する2人の男性の事例」『国立民族学博物館研究報告』14(4): 783-820。

MEEHAN, B.

- 1982 *Shell Bed to Shell Midden*. Canberra: Australian National University Press.

MEEHAN, B. & R. JONES

- 1980 The Outstation Movement and Hints of a White Backlash. In R. Jones (ed.), *Northern Australia: Options and Implications*, Canberra: Research School of Pacific Studies, pp.131-157.

PETERSON, N.(ed.)

- 1981 *Aboriginal Land Rights: A Hand Book*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
1983 *Aboriginal Arts and Crafts Pty Ltd: a Brief History*. In Loveday & Cooke (ed.), *Aboriginal Arts and Crafts and the Market*, Darwin: The Australian National University North Australia Research Unit.

ROWLEY, C.D.

- 1970 *The Destruction of Aboriginal Society*. London: Pelican Books.

杉藤重信

- 1990 「長老ブルマラの世界」中野不二男編『もっと知りたいオーストラリア』弘文堂, pp.72-94。

杉藤重信・窪田幸子

- 1986 「ウィークエンド・ハンター」『季刊民族学』36: 88-93。

THOMSON, D.

- 1983 *Donald Thomson in Arnhem Land*. Melbourne: Currey O'Neil.

TINDALE, N.B.

- 1974 *Aboriginal Tribes of Australia: Their Terrain, Environmental Controls, Distribution, Limits, and Proper Names*. Berkeley: University of California Press.